
ある作文より

——人間同士の教育を考える——



津 守 真

先日、以前に私が相談にのったことのある、ちえおくれの子どもさんをもったおかあさんが、その子どもの姉さんの作文をもって私をたずねてこられた。姉さんといっても小学校二年生で、ふたごのきょうだいである。弟の方は、二歳のときに高熱を出して以来発達がおくれ、小学校にもゆかれず、特殊学級や児童学園にもいれてもらえない子どもでもある。おかあさんは、姉弟の能力は違っても、家庭の中で二人がきょうだいとして楽しい経験をするようにと、一生懸命になってこられた。私はその作文を見て心を打たれた。そして多くの方に読んでいただきたいと思ったので、ご両親のおゆるしを得て、ここに掲載させていただく。

おとくと

こうのいけ たくみ

武蔵野・境北小・二年

わたしはみちを歩いているとき、ときどきかわいそうな子を見ます。こうつうじこで、手が一本なくなっただ子もいますが、わたしはとくにび

ようきのせいでもへんなふうになった
子をたくさんみます。

わたしのおとうともそういう子の
なかまです。わたしは「たあちゃん」
とおとうとをよびます。たあちゃん
は、わたしとふたごですが、二歳の
ときおねつのびょうきにかかって、
そのためにつまでたつても、ちえが
すすまないのです。

いつだったか、わたしが、みどり
ちゃん、まきちゃんと帰ったら、ベ
ランダにたあちゃんがいました。す
ると五年生ぐらいの子がたあちゃん
のことを「あいつ、ばかだあ」とい
ったり、たあちゃんのまねをしてい
ました。わたしはたあちゃんが、か
わいそうになつてなみだが出てしま
いました。わたしがそとをみおろし
ていると、びょうきで手や足のほね

がふとくなつたししょうちゃんとい
う子のことをみんなでいじめているの
がみえました。わたしはママに「し
ょうちゃん、かわいそうだね」とい
いました。

たあちゃんはようちえんにいって
います。いつか、いっしょについて
行ったことがあります。そこにはた
あちゃんみたいなかわいそうな子が
たくさんいました。わたしは、ひっ
かかれても、ないたり、おこつたり
はしません。ただただあたまをなで
てあげるだけでした。

たあちゃんはこのごろすこし、し
ゃべれるようになりました。「ママ、
パパ、バス」の三つです。早く、わ
たしのことを「おねえちゃん」とよ
んでくれればいいなあと思っていま
す。

この作文には、職員室でも多くの先生方が感心されたときく。だれもの心を動かす何かかふくまれている。それはこの子どものうちに、人間にとつてたいせつな何ものかが養われていることを発見するからであろうかと思う。それは、頭のよしあしや、外ぼうのいかんにかかわらず、生きている人間同士に共通のものを見出し、仲間として受けられている子どもの姿をみるからであろう。頭で考えてそうせねばならぬと思つてしているのではない。家族の中で共に生活して、中から生まれた心情ともいうべきもの、人間の間、奥深くに共通に流れる心情を、この子どもはつかみとつている。その裏には、この子どもさんをめぐつて、ご両親が苦闘してこられた生活の重みがある。そして、その一つの屋根の下で共に育つた子どもだからこそ、わかることのできたことである。

このことは、一般に、人間の教育にとつてたいせつなことである。そして現代の教育にもっとも欠けた部分である。それは、家庭の中で、また幼稚園や学校の中で育てられねばならないことである。

この作文から、私が思い起こした、もう一つの文章がある。

それは、以前に東大の総長をしておられた矢内原忠雄先生の晩年になされた講演の文章『子供のために』である。その中で、先生は、子どもを大事にする思想的根柢はどこにあるかということをわかりやすく説いておられる。第一に、子どもの中に人間の理想の姿を見いだす「子供の無邪気さ、死を考えない、汚れに染まない子供の姿こそ、人間本来の姿」であるという見方が、歴史の中にあらわれることを述べておられる。これは、十九世紀末から二十世紀初めにかけての、児童中心運動の主張したところである。第二には、児童を将来の労働力、将来の兵力というような人的資源として大事にするという考え方をあげておられる。これは、戦時中わが国でもさかんにいわれたことであるが、子どもの見方という点では、戦後もひきつづき、人々の抱えている考えの一つであろうと思う。第三に、矢内原先生があげておられるのは、子どもが弱者であり、無力者であるという事実そのものの中に、子どもを大事にするとの思想的根柢があるということである。先生の文章を引用することを許していただくと思う。

「一体、社会は概して力のある者が横暴で、暴力をふるい、力のないもの、弱い者が日陰者になるのがありがちの

ことです。家庭について考えてみると、子供が家庭の中心である。子供が生まれますと、家庭の主人は子供で、みな子供に仕える。社会でもそうであります子供をただかわいいと思うだけでなく、その弱いもの、力のないものに仕えるところに、人間の人間らしさがある。子供のことを心にとめて、弱者、無力者としての子供をいたわり、その生命を尊重するところに社会のうるおいというか、社会生活の中心がある。そういう面がございます。

人生というものは、人を従えることが成功のように思われがちでありますけれども、実はそうではなく、人に仕えることが人生の意味である。社会的にみてもそうであって、人に奉仕することが社会存在の意義である。そういうことを考えると、子供は家庭の中心であり、また社会の中心であって、人は子供に仕えることによって自分自身の人生の喜びを見いだす。また社会も社会の喜びを見いだす。こういう面があるように思うんです。」(矢内原忠雄全集、第二十二巻、P 9 岩波書店発行、転載許可)

つづいて、先生は、ある精薄児をもった家庭のことに言及して次のようにいわれる。

「どうしてこういう精薄児童とか身体障害児童とか、特

殊の悪い先天的あるいは後天的な環境もしくは素質をもった子供たちの面倒を社会はみるのか。これを単に唯物論的に考えますと、そういうものを世話しても将来の労働力になるわけではなく、社会のリーダーになるわけでもなく、兵隊になるわけでもない。いわば足手まといの厄介者であります。しかるに家庭でみましても私の知った家庭にもありませんけれども、小さいときに脳膜炎をわずらって白痴になった子供をもった家庭がありました。その家庭の中心はその白痴になった女の子でありました。

その子を愛し、その子の世話をすることで、その家庭全部が力をあげてそれにかかっている。その子は家庭の厄介者ではなくて家庭のエンジェルである、天の使である、その子のお父さんが申しておりました。二十歳まで生きました、ついに病気でこの世を去りましたけれども。家庭でそういうふうに感ずることく、社会も精薄児とか身体障害児とか、特に弱い特殊の児童を世話する、顧みるということが、体裁のためとかあるいは功利主義的な考えからでは、とても割り切れないものがある。児童問題そのものが、おとなの問題であり、社会あるいは家庭そのもの問題でありまして、なぜこれらの子供たちの世話をしなければなら

ないか世話をするかということに、人間というものの深い意味、ひいては社会というものの深い意味があるように思えます。」（同上、P 10）

小学校二年生の子どもの作文を掲載させていただき、そのことの意味を明かにするために、矢内原先生ご自身の文章を引用しないと不十分な気がして、あえて、長い文章を転載させていただいた。

人間の社会で、強いと思っているものが、実は弱い者によって支えられているという人生の価値の逆転がここに見られる。二年生の姉が、人間としてたいせつなものを、この弟があることによつて教えられている。学校の先生が、またその子どもから教えられる。私もまた、この姉弟によつて、教えられている。弱い者がいなくなつたら、人の心は索莫としたものに墮してゆくのであろう。

さらに思うに、子どもが他の子どもとつきあう社会性を養うことは、たんに社会的能力をつけるというだけではない。社会性をつけるということが、その子がうまくやっていくための能力というにとどまるならば、人間同士のつきあいとして欠けるのではないか。幼稚園や学校という子ども

もの仲間の集団では、人間同士の心情にふれる深い共感がなければならぬのではないか。

現代の教育体制において、特殊児童―身障児を、普通の幼稚園や学校からはずして、特殊施設をつくることにより、問題が片づいたと思つたら、それは大きな間違いであろう。また、これは身障児の問題であるだけではない。どの子どもにも共通の問題であつて、教育においては、子どもが自分のために能力をつけるだけではなくて、人や物、自然、世界の内側にあつて真なるものに感じる力を育てることが大きな課題であると思う。そしてそれは何も特別なことではない。毎日の子どもたちとの自然なふれあいの中で育てられるものである。子どもたちはそのような力をもっている。

